

Les Œuvres de Terumasa Kojima

小島輝正著作集

Ⅳ

エッセイ集 1

——人間の自由——



小島輝正著作集刊行会

浮游社

小島輝正著作集

Ⅳ

エッセイ集 1

—— 人間の自由 ——

浮游社

小島輝正著作集 第四卷

エッセイ集1 — 人間の自由 —

一九八九年五月五日初版発行

著者 小島輝正

発行人 小島輝正著作集刊行会

発行所 (有)浮游社

大阪市天王寺区石ヶ辻町三一〇 宝栄ビル四〇四号
電話(FAX) 〇六・七七二・七六七二

ブックデザイン 倉本 修

写植組版・製版・印刷・製本・大阪出版印刷株

定価 一二〇〇円(本体二〇三九円)

落丁、乱丁本は送料小社負担でお取替え致します。

目次

第一部

記録文学 9

反映とはなにか 25

人間の自由 33

・

留学についての雑感 55

好色とフェミニズム 67

久坂葉子 77

青野季吉・小説『心輪』 89

第二部

「新思潮」一四次の一

あるベトナム人作家

文献集めの話 117

113 109

Que sais-je ? 121

『夜ひらく』寸感 127

戸田と私 131

青木靖三のこと 135

新島 繁 139

解説 直原弘道 175

表記について

原則として旧漢字・旧かな遣いは新漢字、新かな遣いに改め、
外来語については、原文に従いました。

エ
ッ
セイ集
1
—
人間の自由
—

第一部

記録文学

一 記録文学の特質と意義

記録文学とはなにか

記録文学と一般にいわれているものを定義することは、ある意味ではしごく簡単である。しかし、別の意味では決して簡単でない。

つまり、記録文学を、この本のなかで「詩」「小説」「戯曲」という風に列挙されている、文学の他の諸ジャンルと並行する一つのジャンルとして抽象的に規定するつもりならば、それは、要するに「事実」を記録する一切の文学作品である。したがって、それは、ルポタージュ、ドキュメンタリーから、生活記録・日記・手記・旅行記・探検記・さらには自伝・伝記にいたるまで、すべて事実にもとづくノン・フィクション（非虚構）の文学作品を包括しうる概念である。すなわち、最も端的にいて、それは、「事実を、そして事実のみを書く」文学である。

しかし、ことがらをいくらでも実体的にみる場合、この抽象的一般的規定は、たちまち有効性を失う。

たとえば、本来フィクションとみなされている小説のなかにも、実際には事実を、そして事実のみを書き、あるいは書こうと意図した作品があるのではないか。

逆に、記録文学と考えられているものも、果してそのすべてが、事実の単なる記述のみにとどまっているであろうか。

どちらの側から考えるにせよ、問題は、抽象的なジャンル規定をこえて、文学の諸領域にまたがる本質的な論題、つまり、文学における事実と虚構という根本的な命題にかかわってくる。記録文学について考える場合、まずその根本的な問題に足場をすえておかないと、そもそもジャンルの定立そのものが不可能、あるいは無意味なものになってしまうだろう。なぜなら「事実を書く」ということは、口でいい、あるいは漠然と考えるほど疑義のない作業ではないからである。

事実とは何か

まず、「事実を書く」というが、その「事実」とはいったいなになのだろうか。

「事実」をもし、「実際に存在したもの（一定の山とか町とか建築物とか、あるいは存在としての人物とか）」、または「実際に起こった出来ごと（一定の戦闘とか水害とか労働争議とか）」と限定して考えるならば、ことがらはそう困難ではない。それらの「存在」または「事件」は、それ自体としては、人が、視覚・聴覚その他の知覚を通じて直接に認識しうるもの、本来認識しうるはずのもので

ある。そして、例外的な錯覚や誤認、幻覚や故意の歪曲がないかぎり、まるいものはだれの眼にもま
るく、赤いものは誰の眼にも赤く、ある男が他のある男をなぐった、蹴ったという出来ごと、ある女
が泣いたという出来ごとは、本来だれにとってもそれ以外のことたりえない出来ごとであるはずであ
る。それらの「存在」「事件」のもつ「物質性」「事実性」は何びともこれを侵すこと、変改すること
ができず、それらは、万人に共通な客観的認識の対象たりうるはずのものである。そのような「事実」
のみをもっぱら記述する、写生する、というのであれば、ことがらはそれほど複雑ではないように思
われる。

しかし、われわれが普通「事実」と考えているものは、実は、そのような知覚的事実ばかりではない。
たとえば、そのような個々の「存在」「事件」の相互のあいだの「関係」をもわれわれは「事実」
と考えるのが普通である。ある山はある町にとって有用な森林資源なのか、それとも交通の障害なの
か。ある事件と他のある事件とのあいだには何らかの因果関係があるのか、それともないのか。ある
人物がある事件で重大な役割を演じているのか、それともいないのか、等々。

だれが考えても明らかのように、問題がこうして個々の「事実」と「事実」との間の「関係」には
いつてくると、それについての認識・判断は、個々の知覚的事実の場合のように、つねに一義的かつ
客観的でありうるとはかぎらない。すなわち、そこには、見るものの立場による解釈の多様性が加わっ
てこざるをえないのである。つまり、そこでは「事実」のもつ「事実性」は、侵されうるものとして
書き手に委ねられることになる。

さらに、そして実はこのことの方がより重要なのであるが、われわれが「事実」と考えるもののな

かには、「存在」「事件」のように単なる物質的ないし物理的事実には属さない、人間の「心理的」事実というものがある。ある人が、あるとき、あることがらについて、あるいは他のある人について、どのように考え、どのように感じたか。

記録文学が人間を書いてはならぬといういわれのない以上、そして人間を書くからには、それは、人間的事実としてのそのような人間の意識・感情の記述を全く排除することはできないだろう。ある男がある事件について怒りをおぼえたり、ある女を愛したり憎んだりするということの「事実性」をわれわれは疑うことができないからである。

しかし、この場合もだれの眼にも明らかのように、そのような人間の「心理的」事実とは、「存在」や「事件」のように、知覚的・客観的認識の対象とはなりえないものである。それは、厳密に言えば、書き手が想像力をもって把握し、再構成しなければならぬものである。すなわち、そこには、さきの、事実間の関係の場合にもまして、書き手の主観的判断が介入してこざるをえない。そして、ここまでくれば、「事実を書く」ことを命題とする記録文学と、フィクションである小説との間の区別は、事実上消滅してしまわざるをえないのである。

このように、「事実」を、単なる知覚的事実に限定して考えないかぎり、記録文学といえども、小説と同ような解釈の多義性、想像力の行使をふくみうるものと考えざるをえないのである。

「書く」とはどういうことか

そもそも、「事実を書く」というが、「書く」とはどういうことであろうか。それは、認識した事実

の一切を、ただはじから書きとめる、記述する、ということだろうか。そうではない。

これについては、イギリスの歴史家アーノルド・トインビーのつぎのことばをひいておけば十分であろう。

「あらゆる歴史書は『イリアッド』に似ている。なぜならば、それは、フィクションを完全に排除することが決して出来ないからである。事実を選択し、整理したうえで提示するという作業そのものが、すでにフィクションの領域に属する一つの技術である。」

事情は、記録文学の場合でも全く変わらないと思われる。作者は、あたえられた全事実を羅列的に記述するのではなく、それらの諸事実のなから、提示すべき事実を「選択し、整理し」なければならぬ。その「選択し、整理」する作業こそが、まさに、「書く」という仕事なのであって、表現とか文体とかいう問題は、そのあとにくる、ほとんど自然発生的な問題なのである。

ところで、そのような「選択・整理」には、当然、そのための基準が必要である。すなわち、あたえられた事実の総体のなから、どの事実を提示すべきものかと考えるかという判断が必要である。その判断が、歴史家の場合にはかれの歴史解釈（即ち史観）なのであり、記録文学作者の場合にも、そのような判断、つまりかれの事物観・世界観、要するに思想がなければ、実は一行も書くことができないのである。

このことをいいかえれば、記録文学作者は「事実を書く」というが、たとえ「事実」であろうと、

それを「書く」のである以上、そこには、必然的に、その事実についての「意味づけ」が含まれてくるのである。それは、対象が単なる知覚的事実であっても同じことである。そもそも、「書く」とは、事実に意味をあたえること、あるいは事実のもつ意味を発見することである。ある対象に意味をみとめるからこそ、人はそれを書くのである。

記録文学とフィクション

以上のことから、「事実を、そして事実のみを書くこと」を前提とする記録文学の場合でも、作者の事実解釈、意味づけ、すなわち作者の思想が必要であり、その意味でそれは、文学の他の諸ジャンルと変わるところがないことが理解されるであろう。記録文学とフィクションとの抽象的隔離は、ここでもほとんど不可能なのである。

記録文学とフィクションとの相違は、したがって、厳密には、前者が一次的素材として対象にしうる知覚的事実、すなわち個々の「存在」や「事件」が、文字どおり、虚構、創作に属さない実在的事実にかざられている、という点にだけある。小説家や劇作家が、そのような一次的素材（町や人や出来ごと）をも自由に創造しうるのに対して、それは出発点においてことになっている。

記録文学の現代的意義

記録文学の性格、それとフィクションとの関係を一応以上のようなものと考えたうえで、それならば、そのような、素材の事実性を特徴とする記録文学が、なぜ今日とくに問題にされるのだろうか。